

映画『東方紅』における歴史と政治

—周恩来と「文革」以前の毛沢東崇拜—

The History and Politics in the Movie *East is Red*

— Zhou En-lan and Mao Worship before the “Cultural Revolution” —

鎧屋 一

Hajime ABUMIYA

Keywords : East is Red, Zhou En-lai, movie, Mao Worship

キーワード : 東方紅、周恩来、映画、毛沢東崇拜

はじめに

1964年10月、中華人民共和国建国15周年を記念し、国慶節期間に大型音楽舞踏史詩『東方紅』が上演された。中国共産党の歴史を8つの場面に分け、歌曲、楽曲、舞踏、歌舞を組み合わせた、3000人以上が出演する大規模な作品であった。毛沢東、劉少奇、朱徳、周恩来、林彪、陳毅など党中央の指導者がこぞって観劇に赴いた。この舞台芸術『東方紅』は翌年に映画化され、1965年10月の国慶節で上映され、大いに人気を博した。映画『東方紅』が制作されたがゆえに、紙媒体では記録されない大型音楽歌舞史詩『東方紅』の舞台芸術としての具体的な内容を知ることができる。

本稿では、映画『東方紅』の制作過程、作品の構造、その政治的意義について考察し、中国共産党の「歴史」が如何に作られ、如何に再生されたかを分析し、「文革」直前のこの時期における文学芸術と政治との関係、毛沢東思想の称揚と個人崇拜、およびその現代的意義について説明することを目的としている⁽¹⁾。

I 映画『東方紅』の制作

(1) 映画化の開始

大型音楽舞踏史詩『東方紅』を映画化する課題は早くから提示された。1964年10月2日の初演以降、北京では14回連続で上演した。毛沢東、周恩来が参加者を接見し、中国最初の原爆成功が告げられた10月16日夜、周恩来は関係責任者を寓所である中南海の西花庁に召集し、毛沢東ら党指導者との記念撮影の興奮冷めやらぬ制作スタッフを前に、『東方紅』の映画化を提案

し、自ら指導することを告げた。これを承けて制作指導班のメンバーを拡大することとし、文化部電影局の司徒慧敏、八一電影制片廠、北京電影制片廠、中央新聞紀錄電影制片廠の3電影制片廠の責任者を追加し、王苹、李恩杰を監督、薛伯青、錢江を撮影担当とした。さらに芸術指導を強化するため『東方紅』電影導演団を設置した⁽²⁾。徐肖冰の回憶では、映画の撮影における周恩来の方針は「毛主席の輝かしい姿をしっかりと撮るのだ。とくに毛主席は人民の救いの星であり、人民の指導者であることを際立たせなければならない」ということで一貫していたという⁽³⁾。

(2) 指導方針と修正点の確認

1965年1月8日、周恩来は再度、責任者一同を召集し映画『東方紅』を作成するための原則的な指示を行った。その指示は文書で記録されており、1995年によく『党的文献』に発表され、その詳細を知ることができるようになった⁽⁴⁾。その場では周恩来はとりとめのない話し方で多くのことを語っているが、要点は次の2つであると考ええる。

(i) 『東方紅』映画化の指導精神は毛沢東思想の学習と宣伝である。

舞台版の『東方紅』制作過程において、周恩来は繰り返し、指導方針は毛沢東思想の学習と宣伝であることを強調した。映画においても、目的は学習と宣伝である。しかも映画は舞台より観衆が多い。党の誕生から28年間の歴史の鍵となるのは、党の誕生（第一場）、秋収蜂起（第二場）、井崗山（第二場）、遵義會議（第三場）、敵後方への移動（第四場）、蔣家王朝の埋葬（第五場）、中国人民が立ち上がる（第六場）である。この歴史の全体を束ねる思想がないと勝利できない。その思想、つまり毛沢東思想の宣伝が映画作成の目的である、と周恩来は述べる⁽⁵⁾。

あらゆる文学芸術は政治に奉仕するものであるというのが中国における文芸の原則である。それは「芸術の政治化⁽⁶⁾」であるといってよく、『東方紅』もその例外ではない。

(ii) 『東方紅』の映画化は、再創作である。

周恩来の考えでは、舞台版の『東方紅』は、建国15周年を祝賀して首都北京の人民大会堂で上演される、という環境で有効であった。映画版『東方紅』が上映される場所や時間は、舞台版とは条件がまったく違っている。そもそも史詩は史詩の書き方を用いる。故事を書くような劇本ではない。史詩は毛沢東思想を体現した偉大な創作である。よって革命的リアリズムと革命的ロマン主義を結合する方法で、史詩を銀幕に移す。それは再創作に等しい。映画の監督は舞台の監督とともに研究してほしい。昇華させ向上させ、敢えて新しく異なるものを出すのだ、と周は説く⁽⁷⁾。

周恩来が言う「革命的リアリズム」と「革命的ロマン主義」の結合とは、「歴史」を表現するにあたり、芸術的な観点からの意匠を施し、より強く感動を引き出すべく、表現としての凝集性を持たせることを指し、事実に基づいた虚構を構築することでもある。映画化のための再創

作とは、この虚構の再構築を意味している。それは「歴史」というものを芸術作品として彫琢することであり、換言すれば、「政治の耽美主義」であり、そして「歴史」の美学化である⁽⁸⁾。

周恩来は他にも、大衆路線を採り、芸術創作における民主的運営を実施すること、舞台版で採用し成功を収めた組織運営と問題解決の方法を映画版でも採用すること、解放軍の八一電影制片廠の党委員会が政治指導と芸術指導を統一して行うこと、などを述べている⁽⁹⁾。

1965年9月18日、映画『東方紅』は最後のシーンを撮り終えた。その夜から翌日明け方まで、周恩来は一気に全部のサンプルを見終えた。こうして映画『東方紅』は1965年の国慶節に全国で上映された⁽¹⁰⁾。

II 映画『東方紅』の構造

大型音楽舞踏史詩『東方紅』の構造については若干の記録や回想録等から推測することができるが、台本自体が公演の都度書き換えられており、歌曲・舞踏と同様に朗読の台詞も公演の進行とともに改編された形跡がある⁽¹¹⁾。

舞台版から映画版へ改編した際の修正点として最も大きな点は、もともと舞台では8場であったが映画版では6場にしたことである。すなわち舞台版では、「第七場：祖国在前進」「第八場：世界在前進」があったが、映画版では建国後の時期を取り扱っているこの2場が削除されてしまっており、映画『東方紅』は1949年10月の新中国の成立宣言までとなっている。

毛沢東が最初に舞台版を見たとき、たいへん満足したが、「そんなに長くやらなくてもよい。1949年の新中国建設までやればそれでいい」との意見があり、その後舞台では最後の2場を演じなくなり、映画版でもそれが踏襲されたということである⁽¹²⁾。

映画『東方紅』の構造について一覧性の便宜をはかり、「表 映画『東方紅』の構成」を作成した。序曲から第六場まで、朗読、歌曲、舞踏、歌舞を交えて構成されている。導入部の序曲、五四運動・共産党成立・北伐戦争が主題となる第一場、秋収蜂起から井岡山根拠地樹立、土地革命までを扱う第二場、国共分裂、長征、遵義会議での毛の台頭を描く第三場、延安根拠地、統一戦線、遊撃戦と抗日戦争期の第四場、国共内戦と渡江攻撃、南京占領を描く第五場、中華人民共和国の建国とその慶祝を扱う第六場である。舞台版より削除した「第七場：祖国在前進」「第八場：世界在前進」のうち、「国歌」と「国際歌」を第六場に移している。全編1時間50分の長大な作品である。

表 映画『東方紅』の構成

序曲 東方紅	
0-01. 歌舞「葵花向太陽」 0-02 歌曲「東方紅」陝北民歌、李有源詞、李煥之編曲、混声合唱	「東方紅」の合唱。黄色扇を使い向日葵を造形する女性たちの群舞。背景のスクリーンに赤い太陽が昇る。
朗誦（男）：0-1 毛沢東の時代、祖国の人民はとても幸福で、山川はとても壮麗だ。しかし、我々は過去の苦難を忘れはしない。毛主席が我々を導いて万水千山を越えたことを忘れはしない。	
第一場：東方的曙光	
朗誦（男）：1-1 暗黒の旧中国は、天も地も黒く淀んでいた。重い災難の人民は、身に鉄鎖を帯び、頭は3つの山に押さえられていた。君は叫び、戦いを続けてきたが、路は遠く、夜は長い。赤県（ちゅうごく）の長い夜はなかなか明けなかった……。	
1-01 舞蹈「苦難的年代」	上海外灘。「華人与狗不准入内」の標示。洋人と資本家。港湾労働者の苦役。鞭打。軍の招兵。若者が捕まる。労働者の抵抗。洋人の発砲。娘の死。労働者と兵士の乱闘。
朗誦（女）：1-2 暗い夜も終りを迎え、曙が目の前にある。十月革命の銃声が、わたしたちにマルクス・レーニン主義をもたらした。ロシア人の道を歩むこと、これが結論であった。「五四」運動が反帝反封建の旗を掲げ、共産主義思想を伝播した。1921年、偉大な中国共産党が誕生した。毛沢東同志はマルクス・レーニン主義を中国革命と具体的実践的に結合させ、真理の光が中国革命の道を照らし出した。	
1-02 歌曲「北方吹来十月的風」革命民歌、李煥之編曲、斉唱	インターナショナルが響く。マルクス・レーニンの肖像。共産党旗2本。若き毛沢東の肖像。
朗誦（男）：1-3 中国共産党の指導の下、労働運動が嵐の勢いで盛んになり、農民運動は怒濤の勢いとなる。国共合作の新局面が現われ、北伐の大進軍のラッパが響きわたった。	
1-03 歌曲「安源路礦工人俱樂部之歌—工友歌」佚名詞、時樂濤曲、斉唱 1-04 歌曲「農友歌」革命民歌、張士燮詞、王嘉祥曲、女声領唱：王昆、斉唱 1-05 歌曲「工農兵聯合起来」革命歌曲、合唱	労働者の武装部隊。「劳工神圣」の横断幕。「工人糾察隊」の幟。農会の女子部隊。「農民自衛軍」「一切權力帰農会」の幟。労働者と農民が握手。北伐革命軍が登場。兵士、労働者、農民が合流。前進。
第二場：星火燎原	
朗誦（女）：2-1 工農兵は勇敢に前進する。大革命は勢いよくわきかえる。／突然、空に暗雲が立ちこめる。大地は狂風が巻き起こる。蔣介石が革命に背き、大虐殺を開始した。／陳独秀の投降主義路線は、党と人民が敵の突然の襲撃に遭ったときに、有効な抵抗を組織することができなくさせ、大革命は失敗した。中国共産党人と革命大衆の鮮血が黃埔灘頭を、珠江堤畔を、大江兩岸を赤く染め、黄河の上下、長城の内外に到達した。（銃声。呼口号：中国共産党万歳）	
2-01 歌曲「就義歌」革命烈士遺詩、安波・時樂濤曲、混声合唱	広州の港。党員の処刑。労働者、知識人、老若男女の党員が鎖で繋がれ毅然と行進。インターナショナルが響く。
朗誦（男）：2-2 だが人民は殺し尽くせない。革命は滅ぼしきれない。共産党人は脅して倒せない。「彼らは地下から這い出し、体の血の迹をきれに拭い、同胞の亡骸を埋め、戦闘を続けた。」／聞け、南昌蜂起の銃声が、最初の春雷を響かせた。見よ、毛沢東同志が自ら秋収蜂起を指導し、最も明るい火を起し、最初の人民の軍隊を打ち立て、農村革命根拠地を生み出し、武装蜂起の嵐が長江南北に吹いた。	
2-02 舞蹈「秋收起義」 2-03 表演唱「秋收起義」湖南民歌、張士燮・陳杰整理、合唱	秋収蜂起の場面。皆手に松明をもって行進する。舞台を狭しと駆け回る。工、農、兵が踊る。槍と大刀と赤旗を手に進軍。

朗誦（女）：2-3 凱歌が地を動かし、紅旗は天に満ちている。秋収蜂起と南昌蜂起の二つの革命の武力が井岡山で合流した。／工農政権を樹立し、土地革命を徹底し、人民の武装を拡大し、ゲリラ戦争を展開し、一つまた一つと赤色根拠地を樹立した。農村から都市を包囲し、耀く毛沢東思想が偉大な革命の実践を指導する。	
2-04 舞蹈「井岡山会師」 2-05 歌曲「双双草鞋送紅軍」任桂挙詞、彦克曲、女声二重唱＋合唱 2-06 歌曲「西江月・井岡山」毛沢東詞、李劫夫曲、男声独唱＋伴唱、領唱：寇家倫 2-07 歌曲「三大規律八項注意」紅軍歌曲、斉唱	「慶祝勝利会師」の幟。「中国工農紅軍」の旗2本。両部隊の合流。指導者の握手（毛沢東と朱徳の形象）。農民、労働者。農民の女性たちの歌舞。兵士に草履を贈る。男女の兵士が全面に登場、群舞。紅軍指揮官の独唱（毛沢東の形象）。「三大規律八項注意」を歌い進軍。
2-08 歌舞：打土豪、分田地 2-09 歌曲「八月桂花遍地開」革命民歌、李煥之編、女声斉唱＋合唱	地主と私兵。紅軍と民兵・群衆が登場し戦闘。地主たちを捕まえ、老婆が穴の開いた服を手に責める。女民兵と孫が支える。裁判。契約書を破く。農民の娘たちが登場。皆で豊作を祝う。「工農兵政府」の看板登場。孫が紅軍に入る。
第三場：万水千山	
1934年～1936年	
朗誦（男）：3-1 革命はまさに勝利のうちに前進している。赤色根拠地は盛んに発展している。機會主義者が革命の船をわき道へ引き込んでいる。人民の事業はまた大きな危険に直面している。	
3-01 表演唱「紅軍戰士想念毛沢東」任桂挙詞、時楽濠・彦克曲	紅軍兵士の群舞。皆が集まり空の星を見つめる。農民の娘たちも出てくる。
朗誦（男）：3-2 この最も危険なとき、遵義會議は赤い太陽が昇り重い霧を晴らすようだ。毛沢東という我々の偉大な舵取りが、舳先の向きを正し、風を起し帆を張り、我々を導き激流と険しい淵を渡らせ、勝利に突き進む。	
3-02 歌曲「遵義城頭霞光閃」韓笑詞、時楽濠曲、混声合唱	遵義會議場の写真投影。毛沢東の顔つきの旗登場。大合唱。
3-03 舞蹈「飛奪天險」	
3-04 歌曲「飛躍大渡河」蕭華詞、時楽濠曲、合唱	銃撃戦の中、突撃隊が鉄索橋を渡る。全舞台が渡河。
3-05 歌舞「情深意長」王印泉詞、蔵東昇曲、女声独唱：鄧玉華／（紅軍万歳、万々歳）	紅軍幹部と彝族の首長との交流。首長に紅軍旗を渡す。女声独唱と彝族の女たちの群舞。紅軍万歳の掛け声。帽子の交換。
3-06 舞蹈「雪山草地」	
3-07 歌曲「過雪山草地」蕭華詞、時楽濠曲	雪中紅軍。吹雪と暴風の群舞。草地に出る。一人倒れる。水がない。気力で立ち上がる。騎兵の音。敵が来る。戦闘開始。
朗誦（女）：3-3 長征は宣言書であり、世界に宣告する。紅軍は英雄好漢であると。／長征は宣伝隊であり、人民に宣布する。紅軍の道こそが、彼らを解放する道であると。／長征は種蒔き機であり、それが散布する革命の種子は、至る所で発芽し、葉を付け、花を開き、実を結ぶ、、、。	
3-08 歌舞「陝北会師」	
3-09 歌曲「会師歌」紅軍歌曲、男声斉唱＋合唱	
3-10 歌曲「七律・長征」毛沢東詞、彦克・呂遠譜曲、男声独唱＋合唱、領唱：賈世俊	農村風景。農民たちが紅軍を歓迎。3方面軍の会師。群舞。3本の紅旗が並ぶ。兵士の独唱（毛の形象）＋合唱。
朗誦（男）：3-4 労農紅軍一、二、四の三方面軍が西北で合流する。歴史に先例のない二万五千里の長征が勝利のうちに完成した。	
第四場：抗日的烽火	
1937年～1945年	

朗誦（男）：4-1 中国共産党は「内戦停止、一致抗日」の号令を出し、民族の大旗を高く掲げ、数万の民衆を得て抗日民族統一戦線に入った。だが、蒋介石反動派は民族の危機を顧みず、銃口を味方に向け、一心に反共し、日本帝国主義には卑屈にも膝を屈し、大いなる山河を手をこまねいて献上する。どれだけ多くの人が家を失い、故郷を捨てたか。	
4-01 表演唱「松花江上」張寒暉詞曲、男女声独唱＋伴唱、領唱：鄧文挈・蔡国屏（張越男・李光義）	逃亡する国民党軍。街を捨てる民衆。女声独唱と男声独唱。「松花江上」を歌う。
朗誦（男）：4-2 群衆の怒りの火は燃え盛っている。全国人民は共産党の指導の下、「一二九」愛国運動を発動し、抗日救亡の新たな高潮を引き起こした。	
4-02 歌舞「義勇軍行進曲」田漢詞、聶耳曲、楽曲	一二九運動。義勇軍行進曲は曲だけ。「反対華北自治」「停止内戦一致抗日」の横断幕で抗議デモ。軍の鎮圧を押し戻す。
朗誦（女）：4-3 滔々たる延河の水、巍巍たる宝塔山、全国人民みなあなたを仰ぎ見る、革命の聖地延安。あなたは灯台のように、千百万の奴隷となりたくない人々を引き付ける。あなたは抗日闘争の指導の中心。党中央と毛主席がここにおり、全国人民の戦闘を指導する。勝利する日まで。	
4-03 表演唱「抗日軍政大学校歌」凱豊詞、呂驥曲、斉唱	延安の平穏な風景。延河と宝塔。紅軍兵士たちの群舞と合唱。「到敵人後方去！」の横断幕。行進開始。農民が見送る。
4-04 表演唱「到敵人後方去」啓海詞、冼星海曲、合唱	
4-05 歌舞「遊撃戦」	夜間進軍と哨戒。ゲリラ戦。兵士が登場し少しずつ退場。
4-06 歌曲「遊撃隊歌」賀緑汀詞曲、合唱	
朗誦（女）：4-4 八路軍と新四軍は血まみれの奮闘をし日本帝国主義の野蛮な進攻を攻撃した。国民党反動派は何重にも解放区を封鎖し、われわれを閉じ込め餓死させようとした。しかし革命的人民を封鎖することはできない。解放区の軍民とともに党と毛主席の呼びかけに呼応し、猛烈な大生産運動を展開した。自力更生によりすべての困難に打ち勝ち、長期の抗戦を維持したのだ！	
4-07 表演唱「大生産」（歌曲「辺区十唱」龍東民歌、張寒暉曲）、斉唱	延安の大生産の場面。兵士と農民が耕作。女性兵士と農民女性の群舞。種蒔き。収穫。女声独唱。花籠の舞踏。
4-08 歌曲「南泥湾」賀敬之詞、馬可曲、女声独唱：郭蘭英	
4-09 歌舞「保衛黄河」光未然詞、冼星海曲、斉唱＋輪唱	黄河の激流。紅軍と民兵の戦闘群舞。
第五場：埋葬蔣家王朝	
1945年～1949年	
朗誦（男）：5-1 抗戦8年、蒋介石は峨眉山に隠れ、日本の侵略者は投降したばかりだが、この売国奴は全面内戦を発動した。国民党支配区では人民が次々と立ち上がり、飢餓と迫害と内戦に反対した。堅牢な鉄門でも反抗の怒濤を防げない。警察の放水でも闘争の炎を消すことはできない。	
5-01 歌曲「坐牢算什么」緑永・舒模原詞、劉薇改詞、舒模曲、領唱：劉大為・陳岫＋斉唱	白区の都市上海。監禁中の市民たち。鎖で繋がれている。女性が倒れる。団結して立ち上がる。3本の幟、「反飢餓反内戦」「反迫害争自由」「美軍滾出中国去」登場。
5-01 表演唱「團結就是力量」牧虹詞、蘆肅曲、斉唱	
朗誦（男）：5-2 蒋介石は牙をむき爪をふるい、幾百万の軍隊と、アメリカ帝国主義の飛行機と大砲によって、解放区を一気に飲み込もうと妄想した。否！歴史の車輪は戻せない！これは暗黒と光明の決戦であり、双方の運命と双方の前途の決戦である。英明な党中央と毛主席は戦闘の号令を出した：“蒋介石を打倒し、全中国を解放する！”	
5-03 舞踏「進軍舞」	解放軍の進軍。「打倒蒋介石、解放全中国」の旗。
5-04 歌曲「中国人民解放軍進行曲」鄭律成曲、合唱	
5-05 舞踏「百万雄師過大江」（呼口号：中国共産党万歳、毛主席万歳）	「渡江突撃隊」の幟。銃と手榴弾を持って渡河する兵士たち。船が沈んで泳ぐ。逃げる国民党軍と外国人。

5-06 歌舞「 歓慶解放 」(天亮了、解放了) 5-07 歌曲「 解放区的天 」佚名詞、陳志昂曲、斉唱 + 輪唱 5-08 歌曲「 人民解放軍占領南京 」毛沢東詞、沈亜 威譜曲、混声合唱	南京の市街。「歓迎中国人民解放軍」、「毛主席万 歳」、「中国共産党万歳」の横断幕。紅軍の入場式。 歓迎する市民たち。農民の秧歌舞蹈。労働者と兵 士たちの大合唱。戦車登場。
第六場：中国人民站起来了	1949 年
朗誦 (男)：6-1 親愛なる同志よ。あなたは覚えていますか。あの戦火が飛ぶ黎明を、あの吹雪の夜 を。われわれがどのように勝利の日へと向かってきたかを。	
朗誦 (女)：6-2 その日がついに来た。見よ、人びとは喜びの涙を流し、それぞれが感極まっている。 川は歓声を上げ、山はまだ若く、毛主席の世界を震撼させる声に耳を傾けている。	
朗誦 (男)：6-3 中華人民共和国が成立した。中国人民はここから立ち上がった！	
6-01 楽曲「 国歌 」(「義勇軍進行曲」) 6-02 歌舞「 偉大的節日 」／(呼口号：万歳、万 歳、万々歳) 6-03 歌曲「 没有共产党就没有新中国 」曹火星詞 曲、斉唱 6-04 歌曲「 賛歌 」内蒙民歌、胡松華作詞編曲、独 唱：胡松華 6-05 新疆舞 6-06 歌曲「 毛主席、祝您万寿無疆 」(「毛主席的光 輝」) 西藏民歌、劉鉄山・劉行改詞編曲、女声独 唱：才旦卓馬 + 合唱 (毛主席万歳、万歳、万々歳) 6-07 歌曲「 百万農奴站起来 」西藏民歌、劉行改詞 作曲、合唱 6-08 民族舞蹈 6-09 歌曲「 歌唱祖国 」王莘詞曲、合唱	北京天安門。毛の肖像がある。国旗掲揚。万歳三 唱。合唱「没有共产党就没有新中国」。 各民族の群舞。蒙古族の歌と踊り。ウィグル族の 踊り。チベット族の歌と踊り。タイ族の踊り。チ ワン族の踊り。朝鮮族の踊り。 乱舞。花火揚がる。大合唱。
6-10 全場合唱「 国際歌 」鮑狄埃詞、狄蓋特曲	観衆を加え「 インターナショナル 」の大合唱。

周恩来「在大型歌舞『東方紅』朗誦詞修改稿上的批示 (1964 年 9 月 25 日)」『党的文献』1995 年 6 月、11～13 頁。
「1964 年版・大型音乐舞蹈史诗《东方红》朗诵词和歌词」(http://www.360doc.com/content/10/0522/18/1174180_28954844.shtml)

『東方紅』(DVD) 八一電影制片廠攝制、中国三環音像社出版 (ISBN 7-8-88054-157-8)

Ⅲ 映画『東方紅』における「歴史」の編集

(1) 毛沢東思想による「歴史」の編集

『東方紅』の映画化は、『東方紅』の再創作である、と周恩来は述べた⁽¹³⁾。そして撮影過程では、どの作業にも非常な関心をもった。何日も間をおかず制作責任者たちと試写を見て報告を聞いた。再三再四の修正を怖れるなど周は言い、どんな細部も見逃さなかった⁽¹⁴⁾。

周恩来による「歴史」編集の作業内容は、資料的には、1965 年 1 月と 3 月の 2 回分について確認できる。まず 1 月の修正指示は、舞台版『東方紅』の持つ全体的な欠点を指摘し、その解決法を支持している。

舞台版は「起伏がない」というのが周の総体的な問題指摘である。どの場面も艱難辛苦の生活の表現が足りず、人を感動させられないので、映画版ではこの問題を解決しなければならない、と周は説く⁽¹⁵⁾。

周恩来による「歴史」編集の具体的な態様は、例えば次のような指示からうかがうことができる。

「大革命」（「表 映画『東方紅』の構成」の1-05を参照、以下、数字のみ記す）の場では、独唱でその人物を描写する必要がある。「就義」（2-01）では身体の血を拭い仲間の死体を埋葬して、反動派と機会主義との戦いの英雄的気概を表現する。そうしてこそ「秋収蜂起」（2-02）、「井岡山に上がる」（2-04）の意義を引き出せる。「井岡山」（2-06）の場で毛主席の武装闘争と農村根拠地建設と農村が都市を包囲するという偉大な思想を表現する。こうしてこそ3つの「法宝（神聖な武器）」を突出させられるし、建党以来の最も明るい光明を輝かせることができる⁽¹⁶⁾。

ここで「法宝」と周が言うのは、毛沢東による「歴史」の総括に基づいている。毛沢東は1939年に、建党以降18年間の中国共産党史を回顧し、3つの基本問題、すなわち統一戦線、武装闘争、党の建設の問題を正しく処理したことが成功の理由であると総括し、中国共産党が敵に打ち勝つための3つの「法宝」であったと説く。それは周恩来が「歴史」の編集を行う際の嚮導的な概念であった⁽¹⁷⁾。

周恩来が要求しているのは、暗黒と苦痛から、意志と闘争を経て、光明と勝利の喜びへと到ることを際立たせ、敵の攻撃と誤った路線による失敗を強調してこそ、毛沢東思想の正しさを証明できるという枠組みでの「歴史」の「脚色」である。

1月の時点での周の編集要点を拾えばおおよそ次のとおりである。

- ① 2つの路線の闘争を通じてこそ、毛沢東思想の光芒を際立たせることができるのであり、群衆の情緒をより強く表現するべきであり、舞踏も突出が不足している。
- ② 「長征」（第三場：万水千山）では艱難辛苦の戦いを強調すること。
- ③ 「一二・九」（第四場）は抗日戦争段階の高潮であるから、抗日民族統一戦線の大発展を表現すること。
- ④ 「遊撃隊」（4-06）は抗日戦争の苦しい戦いを描くだけでは不十分である（後述の再修正を参照）
- ⑤ 「八路軍軍歌」（5-04 歌曲「中国人民解放軍進行曲」を指す）を加えたほうがもっと雄壮になる。
- ⑥ 「大生産」（4-07）の苦しい戦いを表現する。喜びは後ろの方へ置いても好い。自力更生の精神を突出させるべきだ。自力更生は革命戦争の勝敗に関わる重大な問題である⁽¹⁸⁾。

以上のとおり、芸術的な観点から「起伏」をつくる、換言すれば光と闇の明暗を際立たせることが主眼目であることがわかる。

（2）周恩来の再修正―「歴史」の美学化

3月までには映画化のための修正もかなり進行している。周恩来の要求水準に達した部分も

あれば、一旦修正を経たがゆえにより詳細な再修正が求められるものもある。ここに先に指摘した「歴史」の美学化が行われている。以下では、映像芸術のために、「歴史」の修正が果たしてどのような具体的な水準で行われたのかが分かる、いくつかの例を採り上げて検討してみたい。

まず周が大きな関心と注意を払っていた原則的な問題である「秋収蜂起」と「井岡山」の場面については次のとおりである。

① 「星火燎原」(第二場)(2-02 舞踏「秋収起義」の場面)ではスクリーンの火龍(松明を持つ人びとの行列が彼方まで続く形)はとてもよい。始めは一人が一本の松明で登場する必要はない。なぜならそれに合わせた朗読の台詞は「毛沢東同志は……最も明るい松明を灯した」である。人びとはその人が毛主席にはかならないと誤解するだろう。始めは三人が一本の松明を持ち同時に登場する。一本は大きく、二本は小さく。松明の踊りは前よりも良くなったが、もっと力がある。変化が多すぎる。多いと雑技のようになってしまうので注意が必要だと指示している⁽¹⁹⁾。

② 「井岡山会師」(2-04)はやはり先に会師があつて後に「井岡山」(2-06)を歌うのがよい。「南昌起義部隊」の旗は不要だ。両側は全部紅軍の軍旗を使っていて「中国工農紅軍」と書いてある。朗読の台詞(朗誦(女):2-3)もすでに「秋収蜂起と南昌蜂起の二つの革命武装」とあるので十分だ。会師の指揮員は各部隊から一人ずつ出ると、人は毛主席と朱徳総司令だと誤解するだろう。どちらからも二人が出るのがよい。当時は政委(党代表と呼ぶ)がいた。その前の「工農兵聯合起來」(1-05)の北伐革命軍も含めて、二人の指揮員を出すべきだ⁽²⁰⁾。

周恩来は自らが指導した「南昌蜂起」は『東方紅』で取り上げないように指示していた。

共産党史の主流が、毛沢東の最初の武装闘争である「秋収蜂起」から「井岡山」の革命根拠地建設へと到る路線を強調しようとしている。

次に周にとっては上と同様の原則的な重要事項である「遵義会議」の場面についてである。「遵義会議」は中国共産党史において毛沢東が指導的位置を獲得する契機となった重要な会議である。それゆえ周の要求はかなり妥協を許さないものであった。

③ 「遵義会議」(3-02)の前に「想念毛主席」(3-01)の歌を加えた。この考えは好い。しかし人が少なすぎる。もっと多いのが好い。五組にしてみよう。中間の一組は大きくする。集中して分散し、分散して集中する。これを二回繰り返す。女性兵士と群衆(都市の貧民を含む)を加えてもよい。毛主席の思想には深く厚い群衆の基礎があり、毛主席の指導的地位は確かに群衆の意志に置かれていることを反映させる。始めの人数と、後の毛主席の肖像のある旗と登場する人数は同じにすべきである。終りの船はよく考えている。ただうまく揃っていない。もっと練習してくれ、と⁽²¹⁾。

ここで「船」とあるのは、朗読の台詞(朗誦(男):3-2)にもとづく演出で、毛沢東を

「偉大な舵取り」としたことから派生した舞台上の表現を指している。

周恩来は、1月の指示においても、映画『東方紅』全体が一本の赤い線で貫かれていなければならない、赤い線とは毛沢東思想であり、それはすなわち、党、武装闘争、統一戦線という3つの「法宝」である、と強調していた⁽²²⁾。

ここでも周は「統一戦線」の戦略的な重要性に留意するという視点から少数民族との融和の場面について指示を出している。

- ④「情深意長」(3-05)では、彝族と藏族の首領を老人にしたのは善くない。少数民族の首領は当時、国民党の圧迫を受けており、首領と団結しなければ通過できなかった。遵義会議以前の「左」傾路線は統一戦線を重視しなかったため、自ら孤立してしまい、蘇区の90%、白区の100%を喪失した。毛主席が指導的地位を確立してからは、統一戦線を重視した。これはまさに毛沢東思想の偉大さである。首領がいなければ、統一戦線などではいけない。民族民主革命段階で北上抗日をやるとしても、首領と団結しないではいはずがない。中国共産党の統一戦線の内容は非常に豊富である。中国革命の3つの「法宝」とは、毛主席の革命理論に対する偉大な貢献である、と⁽²³⁾。

周恩来にとっては、舞台上の細かな動作や設定がどれも政治的なメッセージを発しているように見えていたことであろう。

- ⑤「打土豪、分田地」(2-08)では、地主を裁判した後、槍で無理に退場させるのでは処刑する印象を与えかねない。我々が捕まえてはすぐに殺すと観衆が思ってしまうように、やはり高帽子を被らせて引き回すのがよい⁽²⁴⁾。
- ⑥「団結就是力量」(5-01)では、「アメリカ軍は中国から出てゆけ」という幟が登場するが、アメリカ軍と衝突したと表現してはならない。やはり国民党警察が人民大衆を圧迫するように表現するのがよいだろう。アメリカの軍艦が側にあるというのでかまわない⁽²⁵⁾。
- ⑦「夾着尾巴逃跑」(5-05)で、南京を脱出する最初の人が黒マントを着ると蒋介石のように見えるが、実際は彼はとっくに逃げている。最後に逃げたのは何応欽だ。一番いいのは誰かに似ているようにしないことだ。一緒に逃げるアメリカ人は顧問の様子にしているが、スチュアートだとしてはならない。当時はまだ逃げていなかったからだ(駐華アメリカ大使、ジョン・レイドン・スチュアート、1949年8月2日帰国)⁽²⁶⁾。

その他にも、看板の文字の向き、民族衣装のデザイン、小道具、背景の設定などについて修正を求めているが紙幅の関係で多くの事例は割愛せざるをえない。

最後に『東方紅』の位置付けを計るうえで鍵となる事例について触れておきたい。

1月の指示では「遊撃隊」(4-06)は苦しい戦いだけでは不十分だと周恩来は指摘していた。周が求めたのは「軽快さ」であった。この点について3月には次のように発言している。

- ⑧「遊撃戦」(4-05)では、陳毅副総理が「遊撃隊歌」(4-06)を採用しないのは残念だと思っている。今これを加えたのでたいへん良い。30年代の作品に対しては、一を分けて二にする。毛主席の「在延安文芸座談会上的讲话」は30年代の文芸作品について具体的な分

析しており、革命的面を肯定し、消極的な面を批判している。いくつかのことは歴史的事実であり、今日に照らして要求することはできない。『東方紅』の中では、30年代の多くのよいものを吸収しているではないか。革命を表現するのはあるときは勇壮なものが必要であり、あるときには軽快なものが必要である。だから革命歌曲の「遊撃隊歌」は肯定してよいだろう。この歌は、当時は青年学生を動員して革命に参加させるという点で大きな働きをした。水上の一段を削除すればたいへんよい。戦闘の雰囲気強化できる⁽²⁷⁾、と。

周恩来や陳毅にとってはこの曲を採用することは、作曲者である賀緑汀を批判闘争から守るという意味も含まれていたと考えられる。この点については章を改めて述べることにする。

Ⅳ 『東方紅』の政治的意義

(1) 文革直前の政治力学と周恩来

大躍進政策の失敗による極端な食糧難も生産活動を重視する経済調整政策により1963年には解消していたが、その間党内には党内民主主義を求める声が大きくなっていた。毛沢東にはそれが修正主義の蔓延と捉えられており、1962年9月には「階級闘争を忘れるな」と警鐘を鳴らした。そして1963年12月には、戯劇、曲芸、音楽、美術、舞踏、電影、詩、文学など各種の芸術には問題がある、社会主義改造が効果を上げていない、いまだに「死人」が支配している、と文芸界を批判し、党の宣伝部、文化部、文芸界に緊張が走った⁽²⁸⁾。

1964年6月、毛沢東は陸定一、周揚の全国文芸联合会とそれに属する文芸部門の各協会をきわめて強烈な口調で批判した。「これらの協会とそれが掌握している刊行物の大多数は(少数のいくつかはよいそうだが)、この15年来基本的に党の政策を実行していない」、「もし真剣に改造しなければ、きっとハンガリーのペトフィ・クラブのような団体になってしまう」と。これにより建国以来の文芸部門の成果は軒並み否定された。毛沢東による「歴史」の否定である。それ以降、芸術家たちは「反右派闘争」に引き続き、整風検査と批判大会と自己批判の悪循環に陥っていった⁽²⁹⁾。

文芸界を象徴する存在である田漢(中国戯劇家協会主席)がその批判の矢面に立った。そのころから映画、演劇に意見を言うようになっていた江青、康生との間で作品の評価をめぐる攻防が激化した。例えば康生は、則天武后の女官謝瑶環が冤罪を晴らすという筋の田漢の京劇『謝瑶環』は「反党反毛沢東」であると名指しで批判した。かくして田漢は「ブルジョア思想」の「反党反社会主義の大毒草」で「階級闘争」の対象だと目されるにいたった⁽³⁰⁾。

こういう雰囲気の中で、周恩来は3000人余りが参加する大型歌舞を策劃したわけである。その意図は建国以来の文芸に見るべき成果のあることを証明することであり、優秀な芸術家たちを『東方紅』の創作と演出に関与させることで、彼らを保護することにあった。なぜなら『東方紅』は中国共产党を称え、毛沢東思想を宣伝することを主題としていたからである⁽³¹⁾。

(2) 映画化をめぐる攻防

このように1964年6月の毛沢東の批判以来、文芸界の問題をめぐる江青の干渉と攻撃が繰り広げられ、『東方紅』の映画化も例外ではなかった。

12月のある日、全国人民代表大会と政治協商会議の映像芸術家、『東方紅』導演団のメンバーを人民大会堂北京庁に召集し、どのように『東方紅』を映画にするか、彭真、周揚、江青も参加し座談会を開いた。この会議では江青が強烈な反対を唱えた。『東方紅』は始めから終わりまで貫くものがない、芸術も平板、革命的樂觀主義が突出していない、「舞踏は子どもの鬼ごっこようだ」などと言う。修正意見なら問題は大きくはなかったが全面否定であった⁽³²⁾。張春橋は音楽舞踏史詩『東方紅』領導小組の副組長でありながら現場に来ず、消極的な妨害をしており、江青は製作過程で何かと難癖をつけ映画化を誹謗した⁽³³⁾。その矛先は周恩来個人にあったと見られている⁽³⁴⁾。

文芸界に対する肅清の動きに対し、周恩来の処理は周到であったと言える。『東方紅』の上演は軍の文芸工作団を主とするという決定により、軍から来た人が80%を占めたという⁽³⁵⁾。そして最優秀の俳優を選び、毛の詩詞には最良の曲をつけ、最良の歌手に唱わせると主張した。妨害を最小限に止める工夫である。しかしその一方で周は、『東方紅』の中で、大量の民主革命時期の音楽作品を採用するよう指示し、その中に賀緑汀の「遊撃隊歌」と田漢の「義勇軍進行曲」を含めるとした。当時、賀緑汀と田漢は批判されており、この2曲を降ろすように言うものがあったが、大衆が愛した曲であり、勇壮な曲の多い中で「遊撃隊歌」の軽快さが必要だと説得し採用した⁽³⁶⁾。

「遊撃隊歌」の詞と曲を書いた賀緑汀（上海音楽院院長、中国音楽家協会副主席、中国音楽家協会上海分会主席）は1963年にドビュッシーの評価をめぐる姚文元と『文匯報』で論争となった。姚文元は階級的観点が欠けていると賀を攻撃したが、その背後には毛沢東がいたことが知られている。1964年に『東方紅』の審査が行われたさい、江青が「遊撃隊歌」は削除したほうがいいと主張し、周恩来と陳毅がそれに反対するということもあった。賀緑汀は「文革」中は「反党反社会主義分子」「現行反革命分子」として逮捕・監禁されたが、家族とそして周恩来らの工作で1973年1月に釈放された。毛沢東が最後の一線を守った結果でもあった⁽³⁷⁾。

「義勇軍進行曲」（1935年、田漢詞、聶耳曲）は、現在の中華人民共和国国歌であるが、曲折を経た曲である。1935年4月、詞を書いた田漢が逮捕され、逮捕をのがれ訪ソ途中に日本に寄っていた聶耳が「義勇軍進行曲」を作曲し、映画『風雲児女』の主題曲とした。聶耳は日本で不慮の死を遂げ、彼の白鳥の歌となった。この曲は映画とともに全国に広まり、抗日救国運動の中で愛唱された。1949年9月に代国歌とされたが、「文革」中は「叛徒」田漢の歌詞は禁止された。田漢自身は1968年12月「文革」の迫害の中で命を落とし、死後党籍永久剥奪の処分となった。1979年に田漢の名誉回復が行われ、1982年12月に正式に国歌の歌詞も復活した。歌詞は日本軍の東北侵略に抵抗する義勇軍が「立て奴隷となるを願わざる人びとよ。我らの血肉で新な長城を築こう。……」と一致団結と戦闘を呼びかける雄壮な内容である⁽³⁸⁾。

当時、中央宣伝部副部長で「文革」中には9年間監禁された林黙涵は、「1963年以来各地で現代劇が摘発されていた。……周総理は自ら大型音楽舞踏史詩『東方紅』の制作とリハーサルを掌握した。そのときの『三紅』はたいへんな成果であったし、文芸工作者の懸命な労働の結果であった」と回想している⁽³⁹⁾。『三紅』とは『東方紅』、『紅色娘子軍』、『紅灯記』のことで、いずれも周恩来の指示で林黙涵が制作・上演の責任者として関わっていた。

(3) 周恩来による毛沢東の神格化

江青が情熱を注いだ「样板劇」(革命模範劇)の主題は、ひとつは「造神」であり、戯劇に大量の「太陽」の象徴が登場し、毛沢東と共産党が太陽のように光芒を放ち、中国に光明の前途をもたらしてくれることを暗示する。もうひとつは人間性の抑圧であり、あらゆる感情表現が闘争と革命をめぐるとなされていたことである、と王丹は述べる⁽⁴⁰⁾。

王丹の指摘する「样板劇」の特徴は、大型音楽歌舞史詩『東方紅』にもあてはまる。『東方紅』の制作目的が毛沢東思想の学習と伝播であることを周恩来は再三強調していた。『東方紅』に採用された歌曲の多くは各時代において民間や軍隊そして党内で愛唱されてきたものである。その中には毛沢東を「太陽」に擬えて神格化する、いわば毛沢東崇拜、太陽神崇拜といふべき要素が顕著である。以下その例を示してみよう。

- ① 序曲の冒頭では、歌曲「東方紅」の大合唱とともに歌舞「葵花向太陽（ひまわりは太陽を向く）」が登場する。歌詞は「東方紅、太陽昇、中国出了個毛沢東」。「共産党、像太陽、照到哪里哪里亮」。
- ② 第三場の毛沢東台頭の契機となった遵義会議を説明する朗読では、「この最も危険なとき、遵義会議は赤い太陽が昇り重い霧を散らすようだ。毛沢東という我々の偉大な舵取りが、舳先の向きを正し」と朗々と語られる。
- ③ 第五場、国民党軍との内戦に突入した共産党に民衆の支援があることを歌う歌曲「團結就是力量」では、「向着太陽、向着自由、向着新中国、發出万丈光芒！」とある。
- ④ それに続く歌曲「中国人民解放軍進行曲」では、「打倒蔣介石、解放全中国」の幟とともに「我們的隊伍向太陽、脚踏着祖国的大地、……毛沢東的旗幟高高飄揚。……我們的隊伍向太陽、向最后的勝利、向全国的解放！」と合唱される。
- ⑤ 新国家の誕生を祝い各民族が祝福と喜びの舞踏と歌を披露している場面では、蒙古族の旋律で高らかに歌われる歌曲「贊歌」は「从草原来到天安門広場、高举金杯把贊歌唱、感謝偉大的共産党、祝福毛主席万寿無疆、英雄的祖国屹立在東方、像初升的太陽光芒万丈、各民族兄弟歡聚在一起」という歌詞である。
- ⑥ 同様にチベット族の歌曲「毛主席祝您万寿無疆」では、「毛主席光輝、……照到了雪山山上、……融化了千年的冰和霜、……人民領袖毛主席、……我們心中的太陽」と、チベット語を交えた歌詞で、これは名手才旦卓馬のソプラノで歌われる。
- ⑦ 第六場、終盤の盛り上がりで登場する「第二国歌」と位置づけられる歌曲「歌唱祖国」

では、「東方太陽、正在升起、人民共和国正在成長、我們領袖毛沢東、指引着前進的方向。我們的生活天天向上、我們的前途万丈光芒」と歌われる。

大型音楽歌舞史詩『東方紅』の制作と上演に関わり、映画『東方紅』の撮影に携わった空政歌舞団の舞踏家・孟兆祥は「『東方紅』の思想は毛沢東の権威を確立することだった。われわれは内心、彼を神と太陽と同じと見ていた。それがあの時代の芸術に携わるものの政治的背景であつたし、誰もその背景を越えることはできなかった」と回想している⁽⁴¹⁾。

1956年に周恩来が農業合作社の急進政策を批判したことについて、1958年の南寧会議で毛沢東が批判し、その後の8期2中全会、および1959年の廬山会議で周恩来は自己批判をすることになった。1962年の七千人大会での大躍進政策の失敗に対する反省とその後の調整方針が効果を現わし劉少奇と鄧小平の指導が評価され、周恩来もそれを支持していた。指導的権威の弱体化を前にした毛沢東はその権力奪取のために意図的に大衆の毛に対する個人崇拜を利用して。その大きな転換点は1962年9月の中共第8期10中全会における、社会主義社会でも階級闘争を拡大する必要があるという、毛沢東の宣言である。中ソ論争を展開し党中央にも「修正主義」が現れると説き、それを防止する「四清運動」を開始し「修正主義」への肅清が始まった。「周は明かに毛沢東の意向を見てそれに従い、舵を切り替えたのである」と金鍾は言う⁽⁴²⁾。

やがて毛沢東は文化部の康生、宣伝部の江青を使い、文芸部門の「ブルジョア思想」「反社会主義」を摘発することを突破口として、北京市委委員会の呉晗、鄧拓、廖沫沙の批判に始まり、人民日報、紅旗、文化部、宣伝部への攻撃を行い、「修正主義」政策を実行する劉少奇、鄧小平の宣伝機関の外堀を埋めていった。

『東方紅』は中国共産党の「歴史」を創りだそうとしている。歴史の担い手は、組織された労働者・農民であり、紅軍・八路軍の兵士であり、党の指導者たちである。田漢や賀緑汀の問題に見るように文学者や戯曲家たちの「思想」の問題をめぐる批判闘争が始まっていたが、『東方紅』を支持する党の幹部たちの顔ぶれをみると、すでに「文革」の前哨戦が展開されていることがわかる。

音楽舞踏史詩『東方紅』の制作承認の経路を見ると、周揚の制作原案の報告を承認した周恩来は、劉少奇、彭真、羅瑞卿に審査させ、その後鄧小平にも審査させた⁽⁴³⁾。映画『東方紅』上映の翌月、1965年11月、姚文元が上海で『海端免官』を批判する文章を発表し「文革」の幕が上がる。12月、羅瑞卿を批判闘争にかけて失脚させ、翌年5月「文革」で最初の批判対象となった「彭・羅・陸・楊」（陸は陸定一、楊は楊尚昆）が反党集団と批判され全職務を解任される。いずれも文化・宣伝部門の担当者で『東方紅』制作に深く関係していた。8月には劉少奇と鄧小平が批判闘争の対象となり、大規模な批判キャンペーンが始まる。

『東方紅』は何よりも周恩来の「もの」であり、批判すべき「実権派」のものであるとみえたであろう。『東方紅』の映画化は、そのような「文化大革命」の前哨戦の最中に行われていたのである。

1965年3月、周恩来は次のように「歴史」を肯定した。「現在の社会主義革命時期の階級闘

争の見方で過去を見てはいけない。それではすべてが気に入らなくなってしまう。党の政策は、つねに具体的な歴史的条件と結びついている。我々の過去にやった多くのことも、後世の人が見て可笑しく思うかもしれないのだ⁽⁴⁴⁾」と。

「文革」中の周恩来の立場は明確であった。劉少奇・鄧小平を切り捨てて毛沢東の決定に従った。しかしながら、後の「文革派」そしてその背後にある毛沢東にとっては、「実権派」を打倒することは「実権派」の資産である革命の「歴史」そのものを否定することであった。周恩来にしてみれば、このような「歴史」の否定に対し、『東方紅』を映画化することは、自らの手で「歴史」を創造し再生することを意味していた。そのさい、党の「歴史」の正当性の根拠を毛沢東の思想と業績に求めざるを得なかった。それは逆接的ながら「紅太陽」をシンボルとした毛沢東崇拝を徹底的に強化する試みであったといえよう。

むすびにかえて

改革開放時代においてなお『東方紅』に匹敵する規模をもった音楽舞踏史詩が制作されている。1984年の『中国革命之歌』と2004年の『復興之路』である。1994年には、三中全会以後の改革開放の過程を描いた大型音楽舞踏史詩『東方潮』が上演されたが、それは直接『東方紅』の影響を受けていると言われる⁽⁴⁵⁾。

1964年の『東方紅』の人気は衰えず、1997年9月16日、北京で「金泰之夜音楽舞踏史詩『東方紅』 声楽精品音楽会」が催され、1998年5月5・6日には周恩来の生誕百周年を記念して香港で、2000年7月1～4日に北京で総政歌舞団により『東方紅』が上演されている。

反右派闘争で攻撃された文芸界の人物、および文革初期の劉少奇批判に「連坐」した官僚集団は「反党反社会主義」の「修正主義分子」として排除されていった。それに変わるように革命委員会を拠点に軍が党政の主要ポストを独占した。軍とは林彪系の軍人が中心であり、非林彪系は排除されてしまった。林彪事件後は林彪系幹部も排除され、江青・四人組に代表されるような「文革」期に台頭してきた幹部たちがおり、そして「文革」初期に追放され林彪事件後に復活してきたかつての党政軍の枢要を担う幹部たちが勢力を得ていた。彼らを保護し復活を推進していたのが周恩来であった。

周恩来が保護してきた幹部たちの精神的故郷、自画像の核になるような感情共同体が、大型音楽舞踏史詩『東方紅』が呼び醒ます「記憶」、それはすなわち、井岡山、長征、延安、抗日戦争、解放戦争、そして社会主義国家の樹立にいたる、中国共産党の「輝かしい歴史」であった。『東方紅』の映画化とは、それをいつでも再現可能な複製芸術とすることであり、苦難に満ちた栄光の過去を共有しているという感情共同体を固着させる装置でもあった。

そして次のように仮定してみたい。周恩来が保護した幹部たちは「文革」以後の、改革開放期を支える集団であり、思想・心情的には六四事件以後の「保守派」＝「左派」であり、労農紅軍、八路軍、延安時代を自身の過去の姿として回顧する集団である。鄧小平以後の時代においては、紅歌を歌い、腐敗や汚職に反対し、拝金主義を戒める心的傾向を共有しうる集団で

ある。六四事件後の党に対する信念の危機が語られる中、1990年代初、全国に「紅太陽」ブームが登場した。近年の「重慶模式」にみる「唱紅」も記憶に新しい。『東方紅』の機能はまだ失われていないといえないだろうか。

【注】

- (1) 大型音楽舞蹈史詩『東方紅』の誕生と製作過程については、さしあたり、中共中央文献研究室編『周恩来年譜（1949-1976）中巻』（中央文献出版社、1997年）、金衝及主編『周恩来伝（1949-1976）下巻』（中央文献出版社、1997年）、陳揚勇「周恩来与大型音舞蹈史詩《東方紅》」（『党的文献』1995年6期）、周巍峙「高屋建瓴細致入微——周總理領導我們創作演出《東方紅》」（『新文化史料』1998年1期）、袁成亮「大型音楽舞蹈史詩《東方紅》誕生記」（『文史月刊』2004年11期）、黄衛星『史詩《東方紅》創作者口述史』（清華大学出版社、2013年6月）、陳爽「前奏、間奏与余響：文献与図像史料中的音楽舞蹈史詩《東方紅》」（『書城』2009年10期）を参照。また特に、大型音楽舞蹈史詩『東方紅』における「歴史」の再生の問題とその政治的意義については、拙稿「現代中国における『歴史』の再生——音楽舞蹈史詩『東方紅』の場合」（『東洋研究』189号、2013年11月）を参照。映像は『東方紅』（DVD）八一電影制片廠摄制、中国三環音像社出版（ISBN 7-8-88054-157-8）。
- (2) 陳揚勇「周恩来与大型音舞蹈史詩《東方紅》」同上、23頁。
- (3) 司馬清揚、欧陽龍門『新發現的周恩来（下冊）』明鏡出版社、2009年12月、813頁。徐肖冰「周總理對新聞電影事業的培育『人民的好總理（下冊）』』人民出版社、1977年、218頁。
- (4) 周恩来「在《東方紅》導演团座談会上的講話（一九六五年一月八日）」『党的文献』1995年6期。
- (5) 周恩来、同上、14頁。
- (6) 「芸術の政治化」については、田野大輔『魅惑する帝国—政治の美学化とナチズム』（名古屋大学出版会、2007年6月）を参照。
- (7) 周恩来「在《東方紅》導演团座談会上的講話（一九六五年一月八日）」前掲、14頁。
- (8) 「政治の耽美主義」あるいは「政治の美学化」については、田野大輔『魅惑する帝国—政治の美学化とナチズム』前掲、およびヴァルター・ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」『ヴァルター・ベンヤミン著作集2 複製技術時代の芸術』（晶文社、1970年）を参照。
- (9) 周恩来「在《東方紅》導演团座談会上的講話（一九六五年一月八日）」前掲、15～16頁。
- (10) 陳揚勇「周恩来与大型音舞蹈史詩《東方紅》」前掲、24頁。
- (11) 『東方紅』の版本については、陳爽「前奏、間奏与余響：文献与図像史料中的音楽舞蹈史詩《東方紅》」前掲、を参照。鑑屋が参照しているのは『大型音楽歌舞史詩《東方紅》歌曲』（湖北人民出版社、1965年7月）で陳爽の触れない版である。
- (12) 趙淑琴『與毛澤東主席聊天——一段「紅小兵」與「紅太陽」的往時』天行健出版社、2011年3月、62頁。趙淑琴は空軍政治部歌舞団のメンバーで『東方紅』に出演している。
- (13) 周恩来「在《東方紅》導演团座談会上的講話（一九六五年一月八日）」前掲、15頁。
- (14) 陳揚勇「周恩来与大型音舞蹈史詩《東方紅》」前掲、24頁。
- (15) 周恩来「在《東方紅》導演团座談会上的講話（一九六五年一月八日）」前掲、16頁。
- (16) 周恩来、同上、16頁。
- (17) 毛沢東「《共产党人》發刊詞」1939年10月4日『毛沢東選集 第2卷』人民出版社、1966年7月、569頁。これについては、拙稿「現代中国における『歴史』の再生——音楽舞蹈史詩『東方紅』の場合」前掲、を参照。
- (18) 周恩来「在《東方紅》導演团座談会上的講話（一九六五年一月八日）」前掲、16頁。
- (19) 周恩来「对修改排練後的《東方紅》的意見（一九六五年三月五日）」『党的文献』1995年6期、17頁。

- (20) 周恩来、同上、17～18頁。
- (21) 周恩来、同上、18頁。
- (22) 周恩来「在《東方紅》導演團座談會上的講話（一九六五年一月八日）」前掲、16頁。
- (23) 周恩来「對修改排練後的《東方紅》的意見（一九六五年三月五日）」前掲、18頁。
- (24) 周恩来、同上、18頁。
- (25) 周恩来、同上、28頁。
- (26) 周恩来、同上、28頁。
- (27) 周恩来、同上、18頁、28頁。
- (28) 中共党史研究室『中国共產黨歴史第二卷（1949-1978）』下冊、中共党史出版社、2010年、726頁。
- (29) 胡金兆『文人落難記』秀威資訊科技、2013年2月、22～33頁。
- (30) 胡金兆、同上、34頁。
- (31) 顧保孜「周恩来与《東方紅》」『晚霞』2011年05期、50頁。陳揚勇「周恩来与大型音舞蹈史詩《東方紅》」前掲、20頁。
- (32) 陳揚勇、同上、23頁。そのとき、江青が反対した映画には、『球迷』（1963年天馬電影制片廠）、『哥們好』、『霓虹灯下的哨兵』（1964年天馬電影製片廠）、『烈火中永生』（1965年北京電影制片）がある（李捷「史詩《東方紅》的“總導演”周恩来」『北京紀事』1996年12期、5頁）。
- (33) 吳建生「革命史詩 永放光華——喜看大型音樂舞蹈史詩《東方紅》」『山西師院（社科版）』1977年Z1期、81頁。
- (34) 陳揚勇「周恩来与大型音舞蹈史詩《東方紅》」前掲、23～24頁。
- (35) 黃衛星『史詩《東方紅》創作者口述史』前掲、185頁。
- (36) 陳揚勇「周恩来与大型音舞蹈史詩《東方紅》」前掲、20～21頁。袁成亮「大型音樂舞蹈史詩《東方紅》誕生記」前掲、41頁。
- (37) 叶永烈「音樂大師的十年惡夢—賀綠汀蒙難紀實」『中国現代名人蒙冤錄 文苑的悲歌』吉林人民出版社、1994年9月、239～241頁。
- (38) 顧郁豹「歷經曲折的『義勇軍進行曲』」『文史春秋』2009年1期。何顯斌『歌醒神州』人民出版社、2011年7月、41頁。馮新平主編『經典紅歌90首』北京師範大學出版集團・安徽大學出版社、2011年4月、3頁。
- (39) 鐘兆雲「“三紅”背後的周恩来、林默涵」『同舟共進』月刊、2008年第3期、45頁。
- (40) 王丹『中華人民共和國史十五講』聯經出版、2012年1月、180頁。
- (41) 黃衛星『史詩《東方紅》創作者口述史』前掲、59頁。
- (42) 金鐘「周恩來之編年史—中共が出版した四冊本『周恩來年譜』金鐘編、松田州二訳『人間・周恩來 紅朝宰相の眞實』原書房、2007年8月、299頁（金鐘「揚周抑毛編年史—中共出版四大卷《周恩來年譜》」金鐘編『紅朝宰相—周恩來人格解剖』開放出版社、300頁）。
- (43) 南山「總策劃・總導演——周恩来与大型音舞蹈史詩《東方紅》」『党史文匯』1997年5期、3頁。
- (44) 周恩来「對修改排練後的《東方紅》的意見（一九六五年三月五日）」前掲、18頁。
- (45) 陳揚勇「周恩来与大型音舞蹈史詩《東方紅》」前掲、24頁。

（平成25年11月6日受理）